再臨のキリストによる
第５福音書
ヘイマルメネー
―星辰的宿命と神話の現実化―
THE GOSPEL
BY CHRIST OF
THE SECOND COMING
No. 5
III
HEYMALMENEE
SEIDOU
正道

目次

第２部　ディオニュソスの代理人
第５福音書 3
全体の目次 4

第８章　語り始める黙示録
（１）真理の覆いが取られる 7
（２）太陽を着た女 10
（３）アリアドネの物語 13

第９章　対話劇　バッコスの結婚
（１）中絶の決意 19
（２）愛という限界 21
（３）男になる手段としての堕胎 23
（４）ヒエロス・ガモス 25

第 10 章　男性原理まで逸脱した女性
（１）二重の円 29
（２）虚無を見た女 32

第 11 章　王座に引き上げられた子供
（１）赤き多頭の竜 39
（２）太陽を着た女とその息子 43
（３）最後の審判の執行者 46

第 12 章　黙示録の時代としての現代
（１）第四福音書を振り返る 51
（２）赤い多頭の竜の出現 54

第２部　ディオニュソスの代理人

第５福音書

再臨のキリストによる
第五福音書

　ヘイマルメネー
　　――星辰的宿命と神話の現実化

〈天上の婚礼〉に赴く人びとは、手に手をとるような真似はしない。
　はるかに強烈なある力に誘われて、人々は神的な出会いに呼び寄せられるのである。
　生きた人物が扱われている場合には、この者は秘儀の儀式によるガモス（婚礼）を通してテロス（成就）にいたるだろう。

　ケレーニイ『ディオニューソス』より

全体の目次

序　立ち昇る神話

第1部 イエスとディオニュソス

第１章 イエスの影
第２章イエスとディオニュソスの相似点
第３章 生命と死と甦り
第４章 ディオニュソスの発見者
第５章 アポロン的なものについて
第６章 ディオニュソス的なものについて
第７章ニーチェの謂い、ユングの謂い

第2部ディオニュソスの代理人

第８章 語り出す黙示録
第９章 対話劇　バッコスの結婚
第10章 男性原理まで逸脱した女性
第11章 王座に引き上げられた子供
第12章黙示録の時代としての現代
第13章 太陽を脱ぐ女
第14章別ルートによる虚無への降下
第15章 終曲　求めあう光と影

第3部 イースターをめぐる物語

第16章　聖母の出現
第17章　復活

第８章　語り始める黙示録

（1）真理の覆いが取られる

神秘主義者の一人として

私は二一歳のとき、神秘体験に恵まれた。『ヘルメスの杖』に則って言えば、そのとき私は、アルベドの「無限、永遠、救済」と合一したのである。

このような体験を、本書第一部では「アポロン的なもの」と呼んだ。そして「アポロン的なもの」は「十字架上のキリスト」と同じものを指しているとも言った。

じつに、そのような宗教的光明を、若かりし私は、この胸に深く刻みつけたのだった。

これが偉大な体験であることは、今もって私は、少しも否定しない。

だがそれは、歴史的に見れば、決して唯一無二の事例ではない。いつの時代にも「神秘主義者」「神秘体験者」は、ごく少数にしろ、一定数存在していたからだ。

二一歳の私は、要するに「彼らの仲間入りを果たした」というに過ぎない。

実際に過去、プロティノス、アウグスティヌス、スピノザ、マイスター・エックハルト、ニコラウス・クザーヌス、アンゲリウス・シレジウス、ラーマクリシュナ、十字架のヨハネ、空海、西田幾多郎、ゲーテ、ユング、などなど、神秘主義者や神秘体験者と呼ばれた人々は、じつに大勢いたのである。

それこそ、いちいち名前を挙げていけば、右のように、枚挙に暇がないほどに。

ところで、彼ら神秘主義者たちが語る言葉は、研究者から「故郷を持たない」と評される。そればかりでなく、彼らが語る言葉は「起源を持たない」ものとも言われる。

つまり逆に言えば、どこの土地であっても、どの時代であっても、彼ら神秘主義者の「故郷」になるし、また「起源」ともなりうるのである。

それほどにも、神秘主義者たちの言葉は、地域性や時代性を無視した「普遍的同一性」を持っている。

したがって、神秘体験者の仲間入りを果たした二一歳の私もまた、この点では、彼らと同じような成果しか残せなかっただろう。

つまり、もし私が当時何かを語ったとしても、結局「他の神秘主義者たちと、大して変わらないことしか言えなかっただろう」と私は思うのである。

神秘主義の乗り越え

しかし私は、二三歳ごろに神秘主義の枠を乗り越える。その突破力となったのが、陽子との出会いであり、陽子とのヒエロス・ガモス（聖婚）だった。

これを物語として描いたのが、第四福音書の第二部である『太陽を着た女』に他ならない。

その物語の渦中にあって、最終的に私は、神秘主義の座標である「座標 9、アルベド」を超出して「座標 10、ルベド」に至った。

換言すれば「アポロン的なもの＝十字架上のキリスト」の座標から、それよりも上方の座標へと引き上げられたのである。

これは宿命的なことだった。天の計画的摂理によって定められたことだった。

真にそうであるからなのだろう。この天の計画的摂理が「予言」という形をとって、すでに事前に書き記されてあった。

かかる予言が書かれている書物の名を『ヨハネの黙示録』という。言わずと知れた、新約聖書の最末尾にある有名文書である。

この第五福音書の第二部では、私は、読者と一緒に、この『黙示録』の世界に飛び込んでみたいと思う。そこで私たちは、改めて天の奥義の何たるかを見ることになるだろう。

黙示とは何か

黙示とは、ギリシア語の「アポカリプス」の訳語である。

この言葉は、原意としては「覆いを取る」「開示する」といった意味を持っている。

よって、これを宗教的に使用すれば「それまで隠されていた真理や知識が、神意により、人々に開示される」といった意味あいとなるだろう。

ただし、それだと、より一般的に使われている「預言」という言葉との区別が、あまりつかなくなる。預言とは「神からの言葉を預かって、人々に伝える」ということだからである。

つまり、ふだん神の意図が人の目から隠されている以上、その預言の言葉は、当然「隠された内容の開示」という形をとることになるのだ。

となれば、このままだとそれは、先の文章と、内容的にかなりの割合で重なってしまう。すなわち先の、

「それまで隠されていた真理や知識が、神意により、人々に開示される」という文章とである。

では預言の概念とは重ならない、黙示の黙示たる所以とは何だろう。

それはおそらく、預言者に真理や知識が示されるとき、その情報内容が、言葉よりもイメージ、映像（ヴィジョン）に訴えたかたちで与えられる、ということである。

『ヨハネの黙示録』の場合、預言者とはヨハネのことである。このヨハネは、まさしく神的なヴィジョンを神から授かった。言葉よりも、はるかに「絵」として、それを賜った。

そして絵は、言葉を語らない（＝黙る）。だから、その情報開示のあり方は、まさに黙って示すところの「黙示」と呼ばれることになるのである。

もちろんそこでは、言葉も使われてはいる。いや、文章である『ヨハネの黙示録』は、全体として、当然、言葉によって表現されている。

しかし、それは全然、理路整然とはしていないのだ。とくに重要な箇所ほどそうだと言える。

そこには、あるヴィジョンを思い浮かばせるための、絵画的な形容句が羅列してあるだけなのである。

よって、そこに僅かな理論性があったとしても、それは伝達すべき内容としては、まったくの脇役にしかなっていない。

だからこそ言葉（文章）で書かれてはいても、ヨハネによるこの予言記録は『黙示録』と呼ばれているのである。

（2）太陽を着た女

第十二章の記述

そのように絵画的なイメージに満たされている言ってよい『ヨハネの黙示録』であるが、その十二章においていよいよ、かの「太陽を着た女」のことが語られることになる。原文は以下のようなものだ。

また、天に大きなしるしが現れた。
一人の女が身に太陽をまとい、月を足の下にし、頭には十二の星の冠をかぶっていた――

もちろん、この文章には続きがある。しかし、それについて語る前に、この『黙示録第十二章』に対する、心理学者ユングの評価を紹介しておきたい。

この幻視は一風変わっている。これまで（＝第十一章まで）のイメージは事後的に手を加えて整え飾ったものだという印象を拭いきれないが、この部分からは、それが自然のままのものであって、教育的な目的から整理されたものではないという印象を受ける。

ユング『ヨブへの答え』林道義訳より

このユングの評価に、私も率直に同意する。
実際この第十二章より「以前」のくだりは、堕落してしまった諸教会に対する、ヨハネの警告と訓戒とに満ちている。
したがってそこでは、読者は「預言的な文章という武器を使って、ヨハネが自分の敵を攻撃したのではないか」という印象を持たざるを得ない。
いや、形式的には、第十一章までだって、立派な黙示文学ではある。
しかし私たちは、そのとき心のどこかで「ここには人間の恣意が入り込んでいるのではないか」と感じてしまうのだ。

純粋なヴィジョン

それに対して、第十二章の文章は、その冒頭からして、もっと純粋に「神の意図」を伝えている感触がある。

つまり、ヨハネの個人的な意識は、幻視に対して、何の判断も与えていない、ということだ。換言すれば、彼はただ、見たままの画像を伝えているような感じがするのである。

というのも、率直に言って、この章は、その展開があまりにも唐突で、終始これといった脈絡がないのである。いわば、ヨハネが夜に見た夢の内容を、事後的に報告されているようなものだ。

それをユングは「自然のままのもの」という言葉で言い表している。夜の夢もまた、人にとって自然に（勝手に）現れるものに他ならない。

よっておそらく、ここにヨハネの恣意的なものは一切ない。

それは取りも直さず、この第十二章の黙示預言が「神意を伝えるもの」として、最上級の純正価値を持っているということを意味しているのだ。

かんむり座の話

では、あらためて『ヨハネの黙示録』の第十二章を眺めてみよう。

また、天に大きなしるしが現れた。
一人の女が身に太陽をまとい、月を足の下にし、頭には十二の星の冠をかぶっていた。

まずは虚心坦懐になって、この文章に取り組みたい。

徴は天に現れたという。だから私たちは、それを見るために、空を見上げなければならない。

そしてこの空は、文章中に「月」や「星」という語が登場するからには、疑いようもなく「夜の空」であるはずだ。

すると私たちには、すぐさま、黙示録の記述にピッタリと当てはまる星座が見えてくる。

すなわち「星の冠」という言葉どおりの星座であるところの「かんむり座」である。

このかんむり座に、我らがディオニュソスが関わっていると言ったら、読者は驚くだろうか。この星座について神話作家のブルフィンチは、次のように書いている。

アリアドネーが坐ったまま自分の非運を嘆き悲しんでいると、ディオニューソスがその姿を見て慰めてやり、自分の妻として迎えたのであった。

そこで、結婚の贈り物として、宝石をちりばめた黄金の冠を与えてやり、彼女が死ぬ

と、その黄金の冠を取り上げて大空高く投げるのだった。
　すると、その冠が天上へ昇って行くにつれ、だんだんと宝石の輝きが美しくなり、やがて数々の星に変わったのである。
　そして、もとの形をとどめるかのように、アリアドネーの冠は天界に星座の一つとして据えられたのである。

『ギリシア神話と英雄伝説』
　佐渡谷重信訳より

　これがかんむり座の生起譚である。ブルフィンチによれば、星の冠をかぶったのはアリアドネという女性であり、彼女はディオニュソスの妻だという。
　そして一方のヨハネは「一人の女が身に太陽をまとい、月を足の下にし、頭には十二の星の冠をかぶっていた」と言う。
　ならば、この「太陽を着た女」もまた、かかるアリアドネを指しているのだろうか。
　私はそうだと思っている。
　既にここには、そう言うに足る十分な符合があるだろう。
　それに私は、少なくとも古代世界においては、アリアドネこそが「太陽を着た女」と呼ばれるに、最も相応しい女性だとも思っている。
「それは何故か」という読者の問いに答えるためにも、次の節では、このアリアドネについて詳しく見ていくことにしよう。

（3）アリアドネの物語

捨てられたアリアドネ

アリアドネは、クレタ島の王女様だ。

ただしこの王女様の家庭環境は、恐ろしく陰質で複雑だった。なにしろ彼女は「つねに牛の被り物をつけている国王」と「牡牛と性的に交わったことがある女王」との間に生まれた娘なのである。

しかも彼女は、怪物ミノタウロスの姉でもあった。

だが、アリアドネ自身は、この王家で唯一「いたって普通の女性」だった。

そんなアリアドネの前に、異国の英雄テーセウスが現れる。彼は、怪物ミノタウロスを退治するため、クレタ島へ渡航してきたのだった。

アリアドネは、すぐさまこのテーセウスに恋をする。

テーセウスのほうもまた、素直に、このアリアドネの好意を受け入れた。そうしてテーセウスは、アリアドネの助力によって、見事ミノタウロスを退治したのだった。

かくして英雄テーセウスは、意気揚々として故郷に向かう船に乗る。凱旋の船であり、そこにはもちろん、アリアドネも一緒に乗っていた。

そうして船旅をしている間に、アリアドネは、テーセウスの子供を妊娠する。二人の愛の結晶である。ここまでは恋人同士の幸せなストーリーだと言えよう。

ところがだ。船が「ナクソス島」と呼ばれる島に立ち寄ったとき、驚くべき不幸がアリアドネを見舞うことになる。

というのも、なんとテーセウスは、アリアドネをただ一人、その島に置き去りにしてしまうのだ。何という酷い仕打ちだろう。

テーセウスが何故そんな事をしたかは分からない。

アテナがそうするように導いたという説もあるが、少なくともアリアドネにとっては、そんなのは知ったことではない。きっと彼女は、そのときワンワン泣くしかなかったに違いないのだ。

黙示録のヨハネは、まるで、このむごたらしい状況を霊視しているかのようだ。彼の『黙示録』には、太陽を着た女の登場の直後の文章として、次のようなことが書いてある。

〔太陽を着た〕女は身ごもっていたが、子を産む痛みと苦しみのため叫んでいた。

子を産む痛みと苦しみとは、普通に考えれば陣痛のことだろう。
しかし「太陽を着た女＝アリアドネ」と考えるならばである。それは「裏切られた相手の子を孕んでいた、アリアドネの心の痛みと苦しみ」だったかもしれないのだ。
それにしても、まったく可哀そうなことだ。
かよわき妊婦であったはずのアリアドネ。彼女はどうして、こんなにも理不尽な仕打ちに遭わねばならなかったのだろうか。

ディオニュソスとの結婚

こうした非運の妊婦アリアドネの前に現れたのが、我らが神、ディオニュソスだった。
そして、前節で示したとおり、ディオニュソスはアリアドネを慰め、その上で彼女を、自分の花嫁にしたのである。
とはいえ私たちの目には、ディオニュソスのしたことが、何としても奇異なものに映ってしまう。
だから、ディオニュソスの物語を紹介する者が、少々意地悪く、次のように言ったとしても、私たちは「無理もない」と感じてしまうのだ。

ディオニュソスは、何を好きこのんで、他の男の子供を腹に宿しているアリアドネなどと結婚するつもりになったのであろう。

楠見千鶴子
『酒の神ディオニュソス』より

確かに、このような疑問が湧いたとしても不思議ではないだろう。
もっとも、私自身には、これを不思議がる資格はない。私もまた、他の男の子供を妊娠している陽子に、プロポーズをしたからである。それは紛れもない事実である。
そのため私は、ついつい自分に引き寄せて、ディオニュソスと、アリアドネのことも考えてしまう。ディオニュソスもまた、私のように「まだ妊婦と知る前に、相手を好きになったのではなかろうか」と。
つまり、ある女性を好きになったら、たまたま、その女性が妊婦だった訳である。それならば私たちでも話が分かる。

消えた胎児

しかしここには、それでもなお、大きな不思議が残っているのだ。

このあとアリアドネが、ディオニュソスとの間に、複数の子供を産んだという話は、現代にもちゃんと伝わってきている。

しかしながら、アリアドネとテーセウスとの間の子供に関しては、神話は、結局なにも語らずじまいなのである。

まことに不思議なことである。

けれども、実は私は、この件について、ある一つの仮説を持ち合わせているのだ。

すなわち私は、この時の子供は、ディオニュソスの神力によって、中絶させられたものと考えているのである。つまり「堕胎したから、アリアドネの出産話が消えた」ということだ。

もちろん読者にあっては「そのような仮説を、急には受け入れがたい」と仰る方も多いことだろう。

そこでだ。私は次の章で、ちょっとした戯曲（対話劇）を披露しようと思っている。さしあたっては珍奇にしか見えない私の仮説を、読者に、より自然なかたちで納得してもらうためだ。

というのは、私は「このような話題は、きっと、論述するより、物語ったほうが、ずっと内容が伝わりやすいはずだ」と思ったのである。

実際、アリアドネとディオニュソスが出会ったかの日、二人の間には、さだめし次章のような対話があったのではないだろうか。

第９章　対話劇　バッコスの結婚

（1）中絶の決意

――ナクソス島の海岸。向かい合って立っている、ディオニュソスとアリアドネ。すでに幾らかの会話が交わされた後である。アリアドネは、その身なりと後光からの推測で、眼前にいるのが、ディオニュソス神であると、薄々感づいている。

ディオニュソス　アリアドネ、お前に率直に聞きたい。そなたは、その腹のなかの子供を産みたいと思っているのか。
アリアドネ　いいえ、産みたいだなんて思いません。だって、あんなにも尽くして、尽くして、なのに私を捨てた男の子供ですもの。
ディオニュソス　なるほど、テーセウスの子供ではそうなるか。
アリアドネ　……でも女が、孕んだ子供を産み落とすのは自然の摂理。これに従わない訳にはいきません。あと半年もすれば、私は母親となりましょう。そして、そのとき私は、あの憎らしい男に似た子供と対面することになるのです。
ディオニュソス　アリアドネ、今こそお前に教えよう。実は私は神なのだ。あの大神ゼウスの息子なのだ。
アリアドネ　はい、もしかしたら、とは思っていました。
ディオニュソス　神である私には、お前の望みを叶えるに足る力が備わっている。お前が、子供を産みたくないと言うのであれば、私にはそれを現実にすることが出来る。
アリアドネ　本当ですか！
ディオニュソス　ああ本当だ。だから、ことさら聞きたいのだ。アリアドネ、実際にこの望みが叶ってしまったとき、お前はそれを後悔しないだろうか。
アリアドネ　後悔ですって？　いたしません、絶対に！　むしろ私は、この身体に起こったことを、すべて無かったことにしたいのです。テーセウスの匂いも、あの夜の痛みも喜びも忘れたい。とにかく、すべてを忘れてしまいたいのです。
ディオニュソス　では、そうしよう。
アリアドネ　そうしてくださるのですか！

ディオニュソス　ああ。それから、もう一つ尋ねたいことがある。私はお前と結婚したいと思っているのだが、そなたは、この申し出を受け入れてくれるだろうか？
アリアドネ　はい？
ディオニュソス　つまり私は、そなたに結婚を申し込んでいるのだが。
アリアドネ　けっ、結婚？　わ、私とですか？　この惨めな女とですか？

ディオニュソス　まあ、アリアドネという女とだ。

アリアドネ　ご冗談でしょう。こんなにも見すぼらしい立場の女を、神であるあなたが、よりにもよって、妻として迎え入れるだなんて。

ディオニュソス　おかしいと思うか？

アリアドネ　ええ、もちろん。

ディオニュソス　では私はおかしいのだ。それでよい。

アリアドネ　いいのですか……

ディオニュソス　私も自分をおかしいと思うからな。

アリアドネ　ええ、そうでしょうね。

ディオニュソス　だがアリアドネ、この「好き」という気持ちは、しょせん理性で拵えられるものではないのだよ。どこに落ちてくるか分からない稲妻のように、急にこの心臓を射抜いてくるものなのだ。感電して、気がおかしくなる事もあるだろう。そして私は、そなたの姿を初めて見たときに、この稲妻に、すっかり射抜かれてしまったのだ。

アリアドネ　それを信じろと言うのですか？　とても信じられません。

ディオニュソス　そうだろうか。むしろお前こそ、誰よりも、この恋というやつの「何としても非理性的であること」を信じられるのではないか。

アリアドネ　どうしてです？

ディオニュソス　そうではないか。だってそなたも、初めてテーセウスを見たとき、この稲妻に打たれたのだろう。だから、ミノタウロスという身内（弟）の命を犠牲にしてまで、テーセウスに尽くしたのだろう。それは傍から見れば、全く理性的でない、実におかしいことだ。

アリアドネ　……

ディオニュソス　私もそうだ。おかしくなるほど、ただお前を愛してしまったのだ。そして、そのあとで、そなたが妊娠していることを知った。それだけの話なのだ。

（2）愛という限界

アリアドネ　でも、どう考えても、私なんかに、愛される資格があろうとは思えません。神であるあなたに、愛される資格があるとは。

ディオニュソス　いや、逆だ。アリアドネよ、そなたほど私に似合いの女もいないのだ。私は今、それについて考えていた。

アリアドネ　どういう意味ですか？

ディオニュソス　そなたは、ディオニュソスという神が広めている祭りについて、耳にしたことはないか。

アリアドネ　ディオニュソス神とは、あなた様のお名前ですよね。

ディオニュソス　分かっていたのか。

アリアドネ　ええ。その祭についても聞き及んでいます。なんでも、ぶどう酒を飲んだ男女が、相乱れて交わるそうですね。そして、激しい音楽と踊りとが、そこに加わるのだと。

ディオニュソス　そう、それは男女が参加する祭だ。しかし、その祭の「本当の意味」を知ることが出来るのは、実際には、男たちだけなのだ。

アリアドネ　えっ、男だけなのですか？

ディオニュソス　ああ、そうだ。もはや誰彼の違いを気にかける事もなく、ただただ純粋に自分自身の衝動に埋没する者。つまり「衝動そのもの」になって、無個性を獲得した者。その無個性によって「虚無」になりえた者だけが、祭の「核心」に触れるのだからな。

アリアドネ　よく分かりませんが「男にはそれが出来て、女にはそれが出来ない」というのですね。

ディオニュソス　まあ、一時的にならば、女であっても、そこに参入することが出来るだろう。しかし、そこに女の本質はない。そう、そこに仮設のイスはあっても、本当の腰の据え所はない、といったところか。

アリアドネ　一時的には身を置けるけれども、永らく住むことは出来ない。そういうことですね。でも、それは何故なのでしょう？

ディオニュソス　祭にあっては、そなたが言ったように、男と女が乱れて交わる。そして女は、その交わりによって「孕んでしまう」。あまつさえ、子供が生まれれば、その子供を愛してしまう。

アリアドネ　ええ、そうでしょうね。

ディオニュソス　すると、そのとき「愛する者」と「愛される者」という二者が生まれてしまう。そこには、絶対に消すことの出来ない、自分と他人との境界線がある。

アリアドネ　そうですね。愛は「関係」の中に生じるものですから。誰かと誰かがなかったなら「関係」も「愛」も生じようがありません。

ディオニュソス　そして、そうやって誰彼の違いを保とうとする者は、当然「虚無になること」など、絶対に出来はしないのだ。事実、彼女はそれをしない。つまり女は、そのとき愛を選んで、虚無を捨て去ってしまう。

アリアドネ　結局のところ女は、自分と子供を切り離せない。自分と子供という二者関係を捨てられない。そういうことですね。

（3）男になる手段としての堕胎

アリアドネ　けれど男は、それを捨てられる。……ああ、そうですよね。
ディオニュソス　うむ。
アリアドネ　何となれば男は、自分の子供が生まれる「その時」でさえも「自分に子供がいる」という事実を知らずにいることが出来ますものね。
ディオニュソス　そうだな。妊娠の兆候が見える前に、その相手の女と離れてしまえば、そういうこともあるだろうな。
アリアドネ　他でもありません。私たち自身が、そうなのかもしれないのです。テーセウス、テーセウス、テーセウス！　あの男はもしかしたら「いま私が妊娠していること」自体を、全く知らないでいるかもしれないのです。あの人ったら、私のつわりを、船酔いの吐き気だと勘違いしてるかもしれません。
ディオニュソス　まあ、そんな事もあるかも分からない。
アリアドネ　ずるいですよね。一方の女は、我が子の妊娠も出産も、それを知らずにいるなんてことは、絶対に出来ないんですから。
ディオニュソス　結局男の心身は、この事に関しては、無責任な「つくり」なのだ。女の魂は肉体に寄り添っているが、男の魂は、肉体から離れている。だからこそ男は、祭の中でも、肉体の所在すら忘れた「純粋な衝動」になれるのだ。

アリアドネ　つまり、女は損だってことかしら。
ディオニュソス　そうかもしれない。だがしかしアリアドネよ、お前だけは特別な女になれる。
アリアドネ　特別な女……それはあれですか。先ほどの「私があなたに相応しい女だ」という、お話の続きですか。
ディオニュソス　そうだ。お前は今しがた、その腹に孕んでいる子供を「愛さない」ことを誓った。まあ、実際に生まれてしまえば、その決意が頓挫する可能性も、かなりあるがな。
アリアドネ　……
ディオニュソス　けれども今の段階では、そなたの「テーセウスの子」に対する憎しみは純粋なものだろう。そして、その純粋な憎しみが「堕胎」を可能にする。
アリアドネ　堕胎？　それは子供を流産させることですか？
ディオニュソス　いや違う。私が言っている堕胎とは、流産の時のような「痛みや傷」を残さずに、胎児を子宮から取り出すことを言うのだ。

アリアドネ　痛みや傷を残さずに、そんなことが出来ますか？

ディオニュソス　いや、それが大前提なのだ。というのも、体に痛みや傷が残れば、その場合、子供に対する気持ちも残るだろうからな。それでは、心理的には、出産したのと何も変わらない。

アリアドネ　どういうことでしょう？

ディオニュソス　つまり、流産の場合は、彼女の心のうちの「愛」が、肉体的な「痛みと傷」に置き換わっただけなのだよ。使われた糊の種類が何であれ、糊は糊の役割を果たすという訳だ。そして、その糊によって、母と子は、たしかに固く結ばれてしまう。

アリアドネ　ああ……

ディオニュソス　それでは、そなたが望む「全てを忘れてしまう」のうちには、とても入らない。

アリアドネ　でも……堕胎、でしたか。それによって「全てを忘れてしまう」だなんて、そんなにも都合のいい話ってあります？

ディオニュソス　私の神としての力が、それを可能にする。誓って言うが、堕胎後のそなたは、自分がかつて妊娠していたこと自体を、すっかり忘れているはずだ。言うなればそなたは、心の中も、子宮の中も、すっかり空っぽにしてしまうのだ。

アリアドネ　しつこいようですが、本当にそんなことが出来るのですか。私は、心にも体にも傷を作らないまま、このお腹にいる子供を「無かったこと」に出来るのですか。

ディオニュソス　私は神である。よってそれは可能だ。

アリアドネ　でも、何のために、そこまでしてくださるのです？

ディオニュソス　お前を「私に相応しい花嫁」にするために。

アリアドネ　あなたに相応しい花嫁……

ディオニュソス　それを言い換えればこうだ。そなたが、心痛や後悔によって遮られることなく――

アリアドネ　私が、心痛や後悔によって遮られることなく……

ディオニュソス　女の肉体と限界を超えて「私と同質のものに」なるためだ、と。

アリアドネ　……あなたと同じものになるため？

ディオニュソス　まだ難しいだろうか。つまりお前が、男たちと同じく「虚無」の座標まで降りてこられるようにするため、私は、この「堕胎」を行うのだよ。

（4）ヒエロス・ガモス

アリアドネ　虚無……つまり私は、男たちと同じところまで降りて、あなたの祭りの核心に触れるのですね。
ディオニュソス　そうだ。そのときお前は、肉体を離れた衝動となる。そして、ついに虚無に触れることになるのだ。
アリアドネ　男たちと同じように。
ディオニュソス　そう。そして虚無に触れたそなたは、自分の個性を捨てきった証として、こう言うだろう。「私がいない」と。
アリアドネ　私がいない、ですか？
ディオニュソス　そうだ。その時のお前は、もはや誰でもない者（ウーティス）なのだからな。誰でもなければ、当然アリアドネでもない。お前はいなくなるのだ。
アリアドネ　アリアドネは、私は、いなくなるのですね。
ディオニュソス　だからこそ「私がいない」という言葉は、そなたが虚無神ディオニュソスと重なり合った証拠となるのだ。
アリアドネ　重なり合うだなんて言ったら、まるで……
ディオニュソス　フッ、そうだ結合だよ。アリアドネとディオニュソスは結合するのだ。しかも、ただの肉体的結合としての「結婚」ではない。聖なる結婚、ヒエロス・ガモスだ。

アリアドネ　本当に、私の身に、そのような大それたことが起こるのですか。
ディオニュソス　相手がお前だからこそなのだ。相手がお前だからこそ、それは起こるのだよ。実際そなたは、大そうな女なのだ。胎児を捨てて、私と結婚するということ。それは、そなたが「女でありながら、虚無の体現者となる」ということなのだからな。
アリアドネ　虚無を体現する女、ですか。
ディオニュソス　そう。どこまでも特別な「女版のディオニュソスの代理人」と言ってもいい。「男版のディオニュソスの代理人」ならば、いくらでもいるがな。
アリアドネ　男の中に女が一人、という訳ですね。
ディオニュソス　こんな特別な役回りを演じられるのは、きっと、そなたしかいない。きっと、他のどこを探しても見つからない。だからなのだよ、アリアドネ。お前が私に相応しいと言ったのは。
アリアドネ　不遜なことを言わせてください。もしかして私は、会うべくして、あなたと出会ったという事なのでしょうか。

ディオニュソス　ああ、そうだよ。きっと、これは運命的な出会いなのだ。お前は運命の花嫁なのだ。だから特別なお前に贈り物をしよう。ぶどうの蔓で編んだ、私の冠とお揃いの……

アリアドネ　婚約の冠ですね。

ディオニュソス　そうだが……いや、待て。人間であるお前は、こんなものでは喜ばないだろう。ちょっとだけ手を加えて、もっとキレイにしてやる。

アリアドネ　まあ、ぶどうの蔓が金に、ぶどうの粒が宝石になったわ。

ディオニュソス　お前にこれをあげよう。そしていつかは、これを夜空に散りばめよう。永遠に残る、私たち二人の婚姻の証だよ。

第 10 章　男性原理まで逸脱した女性

（1）二重の円

境界線を踏み越えて

「こうしてアリアドネは、ディオニュソスによる堕胎を受け容れた。それによって彼女は、虚無神ディオニュソスとの聖婚を果たしたのだった。

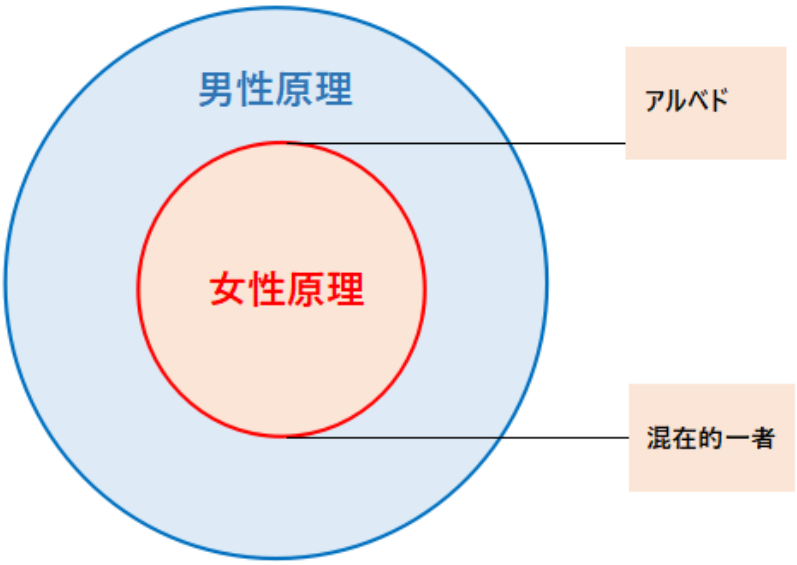
そればかりか、これによって、アリアドネは『ディオニュソスの代理人』の地位を確立することになった」

というのが、前章の対話劇『バッコスの結婚』のエピローグとなるだろう。

そして、このことはアリアドネが「女性原理と男性原理の境界線」を踏み越えたことを意味する。

彼女は女性でありながら、大地の門を降り、ついに地下の暗闇にまで達したのだ。

視覚的なイメージを得るため、読者にあっては、左に示した二重の円を見てほしい。



図の解説

内側の円は、女性原理の範囲を示している。そして、その下限は「混在的一者」に相当する。象徴的に言えば、ここが「大地の門」ということになるだろう。

この混在的一者は、女性的なるものが「自動的に子供を産む」ことの原理だった。

それは「夫 - 妻」の関係としては、妊娠するための性的オルギアを。

「母 - 子供」の関係としては、性的オルギアの結果としての「妊婦」や、その先にある「乳幼児期の、母子一体感」を意味している。

次に、内側の円の上限を見てほしい。それは当然「女性原理の上限」ということになる。

したがって、ここが女性原理の、その最も高く輝かしい座標ということになるだろう。

つまり私たちの言葉で言えば、この部分が「アルベド」に相当するのだ。

アルベドは、精神的、霊的な、女性原理の表れである。

アルベドは、神秘体験者（象徴的息子）を、子宮内の胎児のように包み込む。

そうやって成立するのが「霊的妊婦」の状態である。そのようにしてアルベドは、彼女の息子に「無限と永遠の真理」を垣間見させる。

その真理は、倫理的に見れば、母性的要素の強い「絶対の許し＝救済」となる。

その救済は、無限の対象に、永遠に働くものである。そのように「無限・永遠」は、存在するもの全てを、救済の光によって包摂する。

そのため私たちは、アルベドを「存在の原理」と呼ぶことが出来る。

そして、この「存在の原理」を象徴するのは、遍満する光としての「真昼の太陽」である。

なおかつこれは、同じく象徴として、太陽に照らされて、欠けたるところなく、円満に光る「満月」に等しい。

創造を欠いた光

もっとも、このように「真昼の太陽」と「満月」を等しく並べると、読者のなかで混乱が生じるかもしれない。太陽と月は、物理的には別のものだからだ。

だが太陽の太陽たるゆえんは、やはり厳密には、その「暁」の瞬間にこそあるのである。満月に等しいと言った「真昼の太陽」とは大きく異なったものとして。

これは、読者が実際に「夜の闇から輝く、暁の太陽」を眺めれば衷心から分かることだろう。

そこには「光源から照らされて光るだけの満月」には絶対にないもの。すなわち「闇からの光の創造」という劇的要素が込められている。

しかも、この光の創造性こそが、太陽（恒星）の本質なのである。

アメリカの原住民であるインディアンも、その太陽信仰の告白として、

「昇ってくる太陽だけが神（太陽）だ。昇りきってしまった太陽は、もう神（太陽）ではない」という言葉を残している。

したがって、このような「暁の太陽」を「月」と等価的に考えることは、たしかに決して看過できない誤りとなるだろう。

しかしだ。それが夜と完全に縁を切った「真昼の太陽」であれば、円満に光る「満月」と等しく扱っても何ら問題はない。光は闇（夜）の中からしか創造されないからである。

つまり夜と接点を持たない「真昼の太陽」は、光の創造性よりは、光の遍照的性質（＝光の存在感）のほうを、より強調して教えるものなのである。

言い換えれば、それは満月のような「円満にして無欠の光」をこそ、我々に教えるものなのだ。

そして、このことを暗示するがゆえに、真昼の太陽を司るアポロンは、月の女神アルテミスと双子（等価）なのである。

また、大日如来を本尊にしている密教行者も、その瞑想のさいには、よく月輪を思い浮かべているのだという。

こうした事例を眺めれば「真昼の太陽と、満月の等価性」に疑いの余地はもうあるまい。

距離は高さにも深さにもなる

かくして女性原理とは、象徴的に見れば「大地を下限とし、月を上限とする円」ないし「大地を下限とし、真昼の太陽を上限とする円」である。

しかし、アリアドネは、この女性原理の円を、逸脱して踏み越えてしまう。そう、あの「堕胎」によってだ。このことが『ヨハネの黙示録』の、

一人の女が身に太陽をまとい、月を足の下にし――

という言葉に言い表されている。つまり彼女は、月（女性原理）を足下に踏んで立っているのであり、彼女の視点は、その身長の幅分だけ「高いところ」を見ているのだ。

今や太陽を着た女は、女性原理の内部で生きる女たちには決して知り得ない「未知未踏の景色」を見ているのである。

しかし、そうは言うものの、右のように女性原理を超えることが、必ずしも彼女の認識の「高さ」に直結するとは限らない。

私は女性原理を円で示したが、本来、円というものに、上下というものは存在しないからだ。

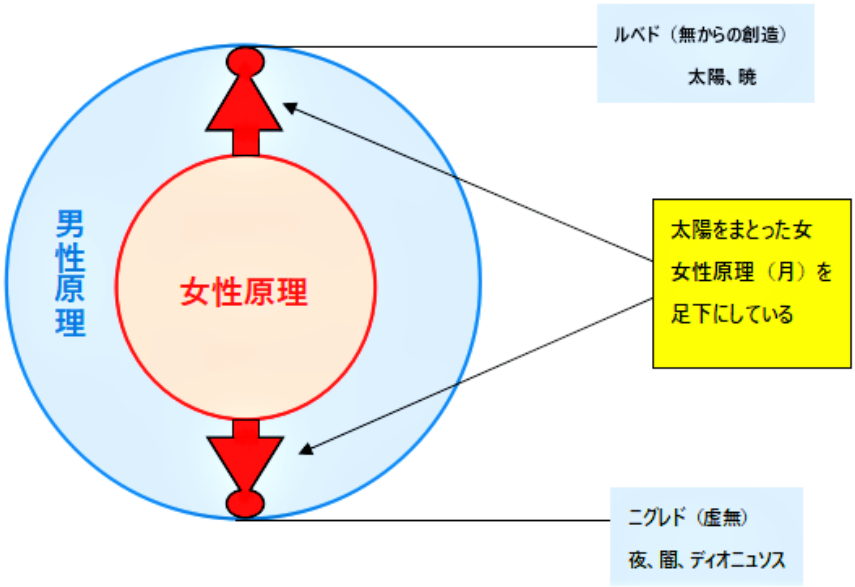
女性原理からの逸脱が、その境界線からの隔離距離を作ることは確かである。だが、その距離は、高さにもなるが、当然「深さ」にもなるものなのである。

（２）虚無を見た女

図と解説

このあたりで、また明確な視覚的なイメージが必要となるだろう。そこで読者には、再び「二重の円」を見ていただこうと思う。

ただし今回の図には、先の「二重の円」に多少のカスタマイズが施してある。



御覧のように、女性原理としての内円をとり囲む、外側のより大きな円が、男性原理の範囲ということになる。

この外円の下限にあるのが「虚無」である。男性が、自身の個性を捨て去ることで到達できる境地。「大地の門」のさらに下にある「地底世界の底」の認識である。

これを人格的に象徴するのが、虚無神ディオニュソスに他ならない。

そして、外円の上限にあたるのがルベドである。

これはアルベドの「存在の原理」と、ニグレドの「虚無」が合成されて出現する境地である。

それは「虚無からの存在の創造」であり、キリスト教の神学用語であるところの「クレアティオ・エクス・ニヒロ」「無からの創造」である。

こうしたルベドを象徴するのが、夜の暗闇から生まれる暁の太陽、あるいは、曙光、東雲である。

暗い深部を見た女

太陽を着た女、あるいはアリアドネは、女性原理を逸脱することによって、月を足下に踏んだ。

それによって、暁の真理である「ルベド」を眺められるだけの「高い視点」を手に入れることが出来た。

しかし、それは率直に言って「不相応に好意的な解釈」である。

よりシビアに考えれば、彼女が見たのは、おそらく暁ではあるまい。

むしろ確実に「彼女が手に入れた」と言えるのは「虚無」の視座のほうである。なにしろ彼女は、堕胎という犠牲を払ってまで、そこへ降りていく資格を得たのだからだ。

もっとも、そうだとしても「虚無」は、確かに、暁の真理の材料ではある。事実、創造の光は虚無から放射されるので、虚無は言わば「曙光の中核」ではあるのだ。

だから「女が太陽をまとって、月を足の下にし」という言葉を、もっとも過不足なく換言するならば、それは、

「彼女は、女性原理である『大地と月』を逸脱して、男性原理の範疇にある『太陽と虚無』にまで、その視野を拡張した」

という事になるのではないだろうか。

太陽を「着る」という言葉

とはいえ、そんな彼女には、おそらく「暁の太陽の真理」を認識するだけのポテンシャルはない。その弱みが、彼女の「太陽を『着た』女」というネーミングに、如実に現れている。

厳然たる事実として、ヨハネは彼女を「太陽の女」とは呼ばなかった。そのようなシンプル・ネームを与えなかった。

ヨハネにとって彼女は、あくまでも、太陽を「着ているだけの」女なのである。

ということは、彼女と「暁の太陽の真理」は、まるで衣服のように「着脱可能な程度の一致性」しか持ち合わせていないことになる。

それこそ一度着た服は、いつかは脱がなければならない。

しかも、これを脱げば、彼女のもとから、すぐさま「太陽の真理」は離れ去ってしまうのである。

一方、これが男であったなら、話は全く変わってきただろう。男性にとってルベドの

真理、暁の太陽の真理は、それを認識することが、本性的にナチュラルなことだからだ。
　そのため彼は、かかる真理に対して、ごく自然な一致性を発揮することが出来る。

男なら「太陽の男」

　しかも、ナチュラルであるがゆえに、その一致性も「結びついたら二度と離れない」ほどの相互浸透性を持つことになる。
　そのように浸透しきっているのならば、当然、これを着たり脱いだりなど出来ないし、そのような事をする必要もない。
　絵的に表現すれば、彼は裸のままで、その体躯そのものから太陽の輝きを放つことだろう。
　よって彼に相応しい名を付けるとすれば、それは当然「太陽を着た男」ではなく、ごくシンプルに「太陽の男」となるはずなのである。
　むしろ男性にとっては、本性的に不自然なのはアルベドの真理である。アルベドは人に「純粋な善」を体験させてくれるが、純粋な善など、人間の（男の）本性に一致する訳もない。
　これが女性ならば、愛（善）のなかに、その意識を溶かし切ることも出来よう。
　しかし男にはそれが出来ない。男の心はあまりにも意識的で、あまりにも自我的だからだ。
　だから「純粋な善」であるアルベドの体験は、男にとって、ごく一過性の短時間体験にしかならないのである。
　そしてルベドの真理に至って、ようやく男の心は、その本来的な身の置きどころを獲得することになる。
　他方、太陽を着た女にとっては、かかるルベドの真理のほうが、この「不自然な、一過性の短時間体験」に相当する。
　いや、より厳密に言えば、彼女はルベドの真理を、一時的に認識することすら出来ないだろう。
　彼女は、ただ無意識に、一時的に、ルベドの真理の、ごく一部分を「体現」するだけである。すなわちルベドの中核である「虚無」として。

彼女を眺める者

　むしろ彼女を「太陽を着た女」として認識できるのは、彼女自身ではなく、彼女を「外側から眺めている」何者か、ではなかろうか。
　そしてここでは、その何者かが「その時すでにアルベディアンとなっている男性」であると想定してみよう。

彼は一般には神秘主義者、神秘体験者と呼ばれている。彼はすでに「存在の原理」を体現している。そういうことになる。

そのような彼が「太陽を着た女」の「虚無」を見たとする。いや、見ただけではなく、その虚無を、自らのうちに受容したとしよう。

すると、アルベディアンである彼は、すでに自分の手持ちである「存在」と、新たな獲得物である「虚無」とを、その両方の手で扱うことが出来るようになる。

つまり彼のもとに、二つの材料が揃ったのである。となれば、いまや彼はこれを一つに結びつけることも出来る。

というより、その結合、合成は、自動的に「起こってしまう」のだ。私の経験上、それはオートマティックな進行だったと言わざるを得ない。

どうやら存在と虚無は、宿命的に、互いを求め合わずにいられない二つの要因なのである。

太陽の本質の現れ

かくして、存在と合成された虚無は、そのとき自ずと「存在を生み出す光」を放つことになる。

それは虚無から放たれる創造の光である。

かつてアルベディアンだった彼の目には、いまやルベディアンとして「虚無からの存在の創造」という「暁」が見えるのである。暁の太陽の真理が見えるのである。

そして、かかる暁の太陽は、決して「満月と同等の、真昼の太陽」などではあり得ない。そのような「アルベドの象徴としての太陽」などでは、断じてない。

暁の曙光。それは恒星としての太陽の本質である。それは発光、輝き、光の創造である。月などには比肩しえない、強烈な光の現象である。純粋至極の「太陽の本質的な姿」である。

つまり、それは紛れもない、ルベドの象徴としての「太陽」なのである。

さて、このような太陽を象徴する「太陽の男」となった彼は、そのとき改めて、虚無を体現する女たる「太陽を着た女」を見る。自分ほどには太陽の真理と一致していない、その女性を。

だからこそ彼は、この虚無を体現する女のことを「太陽を『着た』女」として認知するのである。

第 11 章　王座に引き上げられた子供

（1）赤き多頭の竜

グロテスクな「聖婚」

少し話を戻したい。第9章の対話劇において、私は「ディオニュソスとアリアドネの聖婚」を物語った。

この聖婚は『ヨハネの黙示録』でも描かれている。ただし、それはグロテスクなデフォルメを経たあとの描写である。

まず、このデフォルメという行為（変形・歪曲）について説明しよう。

当然のことながら、キリスト教以前にも、宗教や神話はたくさん存在した。

しかしキリスト教は、強硬な布教によって、それまで存在していた旧宗教を、どんどん折伏（征服）していった。

そして、その際にキリスト教徒は、旧宗教の神々を、悪魔やら妖怪やらへと、次から次にデフォルメさせていった。そうやって、これを徹底的に貶めていったのである。

つまりは、こうした措置によって、新宗教であるキリスト教の正義や美麗さを、旧宗教と対比的に強調したのだった。

それと同じようなことが『ヨハネの黙示録』でも起こっている。

つまりそこでは、ディオニュソスという旧宗教の神が、何とも化け物じみた容姿へと変形させられてしまっているのだ。

さらには、かの「神聖なる結婚」もまた、いまや醜悪な「捕食」へと移し替えられてしまっている。

まずは、とにかく、それに該当する文章を掲げることにしよう。

また、もう一つのしるしが天に現れた。

見よ、火のように赤い大きな竜である。これは七つの頭と十本の角があって、その頭に七つの冠をかぶっていた。（中略）

そして、竜は子を産もうとしている〔太陽を着た〕女の前に立ちはだかり、産んだら、その子を食べてしまおうとしていた。

悪魔、サタンとしてのディオニュソス

この「太陽を着た女」と「赤い竜」のセットは、アリアドネとディオニュソスの聖婚の、まさにグロテスクなトレースである。

まず赤い竜であるが、ヨハネによれば、この赤い竜の正体は、悪魔、サタンなのだという。

というのは『黙示録』の第十二章九節に「この巨大な竜、年を経た蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれるもの」とちゃんと書かれてあるからだ。

そして上山安敏氏の『魔女とキリスト教』によればである。

古代の地中海地域で、大地母神を讃えながら「性的オルギア」を奉納していた女たちは、キリスト教における魔女の原型となったのだという。

もちろんそれは、キリスト教徒による「悪意あるデフォルメ化」を経てのことだ。

そうだとすれば、ここから自然に、次のことが推定されることになる。

すなわち、上記の性的オルギアの中心にあって、主催神として女たちを扇動していたはずのディオニュソス――

この神をキリスト教的に眺めたならば、それは必然的に「魔女たちを束ねるサタン」の原型になりうるだろう、ということだ。

というより、ディオニュソスは、私たち日本人が傍目で見ても、十分すぎるほど胡散臭い神なのである。

このような胡散臭い神を、キリスト教的な色眼鏡で見たら、その姿は、もはや悪魔とかサタン以外の、何者にもならないだろう。

赤い竜としてのディオニュソス

しかもディオニュソスは、ヨハネの言う「赤い竜」そのものでもある。エウリピデスの『バッカイ』に、次のような台詞が出てくるからだ。

牡牛、**多頭の竜**、あるいは炎を吐く獅子の形をとって、姿を現わしたまえ。さあバッコス（ディオニュソス）よ。（逸身喜一郎訳）

『ヨハネ黙示録』に登場する竜。つまり七つの頭があって、そのそれぞれの頭に冠をかぶっている「赤い竜」は、まさしく「多頭の竜」である。

こうなると、私ならずとも、ここに赤い竜とディオニュソスとの同一性を、見ずにはいられまい。

それに竜とは、要するに超越的な蛇のことである。

蛇がディオニュソスの化身であることは既述してあるが、仮にディオニュソスを「神的な（＝超越的な）蛇」とするならば、それを「竜」と呼んでいけない道理はどこにもない。

ついでに言うと、竜の赤い色は、血の色とともに、ルベド（赤化）との関連を想起させよう。

『黙示録』によれば、こうした赤い竜が、子供を産もうとしている「太陽を着た女」の前に立ちはだかる。

そして、彼女が子供を産んだら、その子供を食べようとしていた。

つまり赤い竜は、そこにあって、子供を食べ殺そうと、舌なめずりして待っているのである。

すでに生まれている「胎児」

ところで、ここには「産んだら」と書かれている。彼女が子供を産んだら、と。だから自然と、子供は、まだ生まれていないという事になるはずだ。

しかし、カトリックに代表されるキリスト教倫理では、女性が妊娠した時点で、その女性の子供は、すでに生まれているも同然なのである。

すなわちカトリックでは、胎内の子供を、すでに立派な人間であると見るのだ。

ということは、それを堕胎中絶することは、一般的な殺人行為と何ら変わらないことになる。だからこそカトリックでは、堕胎行為が厳しく禁じられているのである。

彼らは次のように言う。

胎児は母体にやどったときから生きる権利を持っています。直接堕胎、すなわち堕胎を目的、または手段として中絶することは、いちじるしく人道にもとる恥ずべき行為です。

教会は人間の生命に対するこの忌むべき罪を犯す者に、教会法による破門を宣告しています。

胚（受精後に発生する卵細胞）も母体にやどったときから一個の人格として認められるべきですから、あらゆる面で保護され、すべての人間と同様に配慮と治療を受ける権利があります。

ドミニコ会研究所編、本田善一郎訳『カトリックの教え』より

ゆえに、胎内にいる子供を堕胎したならば、その子供は「すでに生まれてから」殺されたのである。

そこで私は、ここで「太陽を着た女が堕胎をした」ものと仮定してみたい。

そして、そうであれば、かかる「堕胎による殺人」を、ヨハネは、赤い竜の仕業と見ているわけだ。それは赤い竜の捕食による殺人である、と。

食べるという一体化

ところで「ものを食べる」とは、対象の命を吸収しながら、これと一体化することでもある。

そして確かに赤い竜は、太陽を着た女の一部（胎児）を食べた。よって赤い竜は、このとき太陽を着た女と一体化したことになる。

もちろん赤い竜は、太陽を着た女の全身を喰らった訳ではない。その子宮のなかの胎児を喰らっただけである。

だが、その与えた影響の制限性は「アリアドネの子宮事情に干渉することによって、彼女と自分を一体化させた（＝自分の代理人とした）ディオニュソス」と何ら変わるところがない。

かくして「食べることによる一体化」という形でもって、太陽を着た女と赤い竜のヒエロス・ガモス（聖婚）が成立する。

むしろ赤い竜がその子宮を捕食したからこそ――ディオニュソス的なものとの聖婚が成立したからこそ――堕胎による虚無への降下が成ったからこそ――彼女は、太陽を着ることが出来たのである。

（2）太陽を着た女とその息子

荒野に逃げる母

太陽を着た女と赤い竜の「捕食による聖婚」が、次なる「驚くべき展開」を呼び込むことになる。ヨハネは言う。

女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖ですべての国民を治めることになっていた。
子は神のもとへ、その玉座へ引き上げられた。女は荒れ野に逃げ込んだ。

太陽を着た女は、男の子を産んだという。彼女の息子が生まれたわけである。それはヨハネの言葉を「ただ読んだだけで」充分に分かることである。
しかし、その出産は、どうも普通の出産とは様相が異なっているらしい。
というのも、子供のほうは神に等しい者として讃えられているのに、その母親は一向に讃えられる気配がないからだ。
それどころか、あまつさえ彼女は「荒れ野に逃げ込んだ」とまで、ネガティブに描写されているのである。
実はカトリックでは――その真偽はともかく――太陽を着た女は、聖母マリアと重ね合わせて論じられることが多い。
そして、この聖母マリアは、神の子イエスを産んだことで、信徒たちから「テオトコス（神の母）」として崇められている存在である。
このように丁重な扱いを受けている、聖母マリアと比べてだ。かの出産直後の「太陽を着た女」のほうは、また何とまあ、一途に「悲しく惨めな女性」として描出されていることだろう。
なにしろ彼女は、崇められるどころか、人々から追われるようにして「荒れ野に逃げ込んだ」というのだからだ。

彼女が逃げた理由

そのように「太陽を着た女」が逃げた理由について、ヨハネは一切何も語っていない。
とはいえだ。そもそも後ろめたさが無かったなら、どうして人が、荒野になど逃げ込む必要があるだろう。

なにしろ荒れ野とは、どこまでも孤独な砂漠のような場所であり、人が住むのに心地いい所とは、口が裂けても言えないような僻地なのである。

したがって、そのような場所に逃げ込むとなれば、当事者は、よほど何らかの「良心の呵責」に苦しんでいることになる。

それどころか、太陽を着た女は、周囲の人間から、直接的に責められているのかもしれない。誰かに責められていると感じていればこそ、人は衆目から逃げ出したくなるのだからだ。

もしかすると彼女は、

「誰にも会いたくない。誰からも責められたくない。だから、誰もいない場所に行ってしまいたい」

と言って、ひた走っているのかもしれない。どこまでも人寂しい荒野に向かって。

そうなると、私などは率直に、

「太陽を着た女は、自分が行った堕胎に対する後ろめたさのために、衆人の刺すような視線から逃げ出したのだ」

と断定したくなってしまう。

そして、そのように考えると、私たちは自然と、次のような結論に導かれることになる。すなわち、

「確かにそこには『女は男の子を産んだ』と書かれてある。だが、その『男の子』の出自は、どうやら、太陽を着た女の女陰ではなさそうだ」と。

端的に言うと、この息子は、太陽を着た女の、肉体的な息子ではないのである。その子自体は、堕胎によって（赤い竜に捕食されることによって）いなくなってしまっている。

だからむしろ、この「男の子」は、太陽を着た女「によって」生み出された、精神的な次元の息子なのであろう。

換言すれば彼は、太陽を着た女によって「神に等しい者」と成らしめられ、この世に送り出された「霊的な息子」なのである。

創造神の本質を掴む

少し話を整理しよう。

太陽を着た女は、赤い竜との聖婚によって、すでに虚無神ディオニュソスの代理人となっている。したがって彼女は、その心のうちに「虚無」を持っていることになる。

これにより、もしもアルベディアンの誰かが、太陽を着た女から「虚無」を受け取れたならばだ。そのとき彼は、たしかに「神のもとへ、その王座へ引き上げられ」ることになるのである。

換言すれば彼は、太陽を着た女「によって」創造神の営為の何たるかを、グノーシスすることが出来るのである。

それというのも、アルベディアンはすでに「存在そのもの」を知っており、これに「虚無」を結合させれば「虚無からの存在の創造」のヴィジョンを形成することが出来るか

らだ。

　もっと簡明に表記すれば、いまや彼には「無からの創造」のヴィジョンを形成することが出来るのである。

　そして何より、この「無からの創造」は、キリスト教における神の定義なのである。

　よって、これを認識することが出来たならば、それは彼が、創造神の本質を掴んだということに他ならない。

　だとしたら、これをもって「神のもとへ、その玉座へ引き上げられた」と言い換えても、全くもって誤謬にはならないだろう。

　こうして、かつてアルベディアンだった男は、今やルベディアンとなった自分を顧みる。

　そして彼は、かくなる自分を成立させてくれた「太陽を着た女」に感謝して言うのである、

「母よ、私はあなたの子供です。私はあなたの息子です」と。

　これが、ヨハネが語る、

　女は男の子を産んだ。

　子は神のもとへ、その玉座へ引き上げられた。女は荒れ野に逃げ込んだ。

　という文脈の、最も無理のない解釈ではないだろうか。

（３）最後の審判の執行者

治世の杖

ただし『ヨハネの黙示録』の原文は、

女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖ですべての国民を治めることになっていた。
子は神のもとへ、その玉座へ引き上げられた。女は荒れ野に逃げ込んだ。

である。そこには重大な付加がある。すなわち、太陽を着た女が産んだ息子は「鉄の杖ですべての国民を治める」ことになっているのである。
私たちは、この部分を見逃すわけにはいかない。というのも『旧約聖書』の詩篇二には、神の言葉として、次のような文言が書かれているからだ。

お前はわたしの子
今日、わたしはお前を生んだ。
求めよ。わたしは国々をお前の嗣業とし
地の果てまで、お前の領土とする。
お前は **鉄の杖**で彼らを打ち
陶工が器を砕くように砕く。

内容から言って、黙示録のヨハネが、
「女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖ですべての国民を治めることになっていた」と書いたときに、この「詩篇二」を念頭に置いていたのは明らかだ。
その上でヨハネは「鉄の杖」というアイテムを、ここに登場させているのである。

最後の審判の情景

そして、詩篇二に描かれているのは、どう見ても「最後の審判」の情景である。
この詩を語っているのは神であり、神が、我が子（キリスト）に対して「全世界の人間を裁き、罰を与えよ」と命じているのだからだ。

分かりづらいならば詩文を少し変形して、
「地の果てまでお前の領土としたならば、お前は鉄の杖で彼らを打ち、陶工が器を砕くように砕くことだろう」
と言い換えてみよう。そうすれば、かなり状況が分かりやすくなる。
要するにこの詩には、明らかに「終わりのときに現れる最終的な裁き」とも言うべき内容が描かれているのだ。
そしてそれは、キリスト教的ドグマで見れば「再臨のキリストによる、最後の審判」に他ならない。パウロもまた、同様の内容を次のように言っている。

世の終わりが来ます。そのとき、キリストはすべての支配、すべての権威や勢力を滅ぼし、父である神に国を引き渡されます。
キリストはすべての敵を御自身の足の下に置くまで国を支配されることになっているからです。

『コリント信徒への手紙一』より

ということは、太陽を着た女の「息子」の誕生は、最後の審判の執行者（＝再臨のキリスト）が現出するためのプロローグなのである。
それはこの「福音書シリーズ」の中心的理念にも適合した解釈であろう。もとより福音書シリーズとは、キリストの再臨を告げ知らせる文書群であるからだ。

まとった、から、着たへ

このように、太陽を着た女は、その堕胎によって、逆説的に「再臨のキリスト」という子供を生む。それが『黙示録』第十二章に隠されていた、秘密のストーリーだった。
それが明らかに開示された、このあたりで本章の叙述を終えたいと思う。
だが章を改める前に、本章で引用した『黙示録』の該当部分を、最後に原典のまま、まとまりのある文章として掲げておきたい。
というのは、解説のためとはいえ、私は不当と言えるほど、あまりにも細かく、ヨハネの文章を切り刻んでしまったからだ。
そして、その切断によって、原文の馥郁たる味わいが、著しく損なわれてしまったことは否めない。このことに対し、私は大いに責任を感じているのである。
ただし、ここで一つ、重要な注意書きをしておかなければならない。
テキストにするのは「新共同訳」の聖書であるが、そこで「太陽を着た女」は「太陽をまとった女」として表記されている。
しかし、私が青年時代に馴染んだ、ギデオン協会の聖書では、同所が「太陽を着た女」

と訳出されており、ユングの日本語訳著作でも、やはり彼女は「太陽を着た女」と表記されているのである。

これは一つには「太陽を着た女」のほうが、語調として「しっくりくるものがある」から訳者に選ばれているのであろう。

そして、内容的に見ても「まとった」では幾分曖昧な「太陽の着脱行為」が、他方の「着た」ならば、よりいっそう明確になるのである。

すなわち「まとう」の反対語も一応は「脱ぐ」なのだが、私たちはどう考えても、日頃、これらの言葉を、ごく自然には使っていないのだ。

それよりは「着る」と、その反対語である「脱ぐ」のほうが、よほど日常的で、私たちにとって、理解しやすい用語として定着している。そうではないだろうか。

着て脱げる程度の一致性――すなわち「太陽を着た女の、ルベドに対する『仮の一致性』」は、本書の重要なテーマになっている。よって私は、ここをなおざりにする訳にはいかなかった。

同様の事情から、「旧」第四福音書のタイトルが「太陽をまとった女」であったのを、新版では「太陽を着た女」に改めた。

そして、この「第五福音書」でも、そのときの変更を踏襲しているのである。

読者にあっては、このあたりの事情を酌量した上で、新共同訳の「太陽をまとった女」という表記を読んでいただきたい。それでは遅ればせながら、原文を掲げるとしよう。

黙示録第十二章「女と竜」より

また、天に大きなしるしが現れた。一人の女が身に太陽をまとい、月を足の下にし、頭には十二の星の冠をかぶっていた。

女は身ごもっていたが、子を産む痛みと苦しみのため叫んでいた。

また、もう一つのしるしが天に現れた。見よ、火のように赤い大きな竜である。これには七つの頭と十本の角があって、その頭に七つの冠をかぶっていた。竜の尾は、天の星の三分の一を掃き寄せて、地上に投げ捨てた。

そして、竜は子を産もうとしている女の前に立ちはだかり、産んだら、その子を食べてしまおうとしていた。

女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖ですべての国民を治めることになっていた。子は神のもとへ、その玉座へ引き上げられた。女は荒れ野に逃げ込んだ。そこには、この女が千二百六十日の間養われるように、神の用意された場所があった。

第 12 章　黙示録の時代としての現代

（1）第四福音書を振り返る

俎上に乗せられる「現代」

これまでに「ディオニュソスの神話」「黙示録の予言」が、それぞれ順番に考察されてきた。そして本章にいたって、いよいよ「現代」が叙述の対象となる。

それは取りも直さず、現代に生きる私が、ここで考察の俎上に乗せられるということである。

とはいえ「現代を生きる正道の身に何が起こったか」については、私はすでに第四福音書で書き尽くしている。少なくとも宗教的な部分については、そこで遺漏なくこれを述べ切ったつもりである。

そのため本章の内容は、往々にして、第四福音書の「第二部、太陽を着た女」と重複してしまうことになる。それについては私も、著者として文脈の冗長を認めざるを得ない。

しかし私は「そうだとしても、かかる重複が、読者に退屈を強いることはあるまい」とも思うのである。

というのも、前章までの内容が、第四福音書の内容に、いまや「まったく新しい意味合い」と「高い神話的価値」とを与えるはずだからである。

私はそのように確信してやまない。

アルベディアンとしての私

さて、私は二一歳でアルベディアンとなった。

その「アルベディアンになるまでの過程」については、さすがにここでは繰り返さない。それは本書のテーマから、大きく逸れることだからである。

どうしても確認が必要な方は、どうか第四福音書を、今いちど紐解かれたい。

本書的に重要なのは、アルベディアンとなってから、ほとんど間をおかない二二歳のときに、私が陽子という女性に出会ったことである。

それは私が、神秘主義者として固着する前に、その次の悟りの段階へと、運命的に誘導されたことを意味している。

いま言った神秘主義とは、要するにアルベド至上主義のことである。

つまり本質的には、主体が「もはやアルベドよりも高い認識は存在しない」と決めつけるのが神秘主義というものなのである。

もし、あと三年、いや二年何事もなかったら、私の悟りは、きっとアルベドの段階で停止してしまっていただろう。

　そして実際にそうなっていたならば、私はアルベド以上の「悟りの進展」など、もはや一切望まなくなっていたに違いない。
　それほどにもアルベドの悟りの内容は絶対的で、かつ魅力的だったからである。
　そう考えると、私が陽子に出会ったタイミングというのは、本当に絶妙だったのだと思う。
　それは「こうもありうる」よりは「こうでなければならない」という感じに近い。
　それだけにヘイマルメネー（星辰的宿命）は、その後も、有無を言わせぬ勢いでもって、私に対し、その強制的な力を発揮し続けることになったのだが。

陽子への告白

　そうやって絶妙のタイミングで出会った陽子に、私は思いもよらぬスピードでもって恋焦がれるようになった。
　心の底から「好きだ」という気持ちがあふれ出て、その思いを抑えられなくなった。そうして胸が苦しくて仕方なくなった私は、ついに陽子に告白しかけたのである。
　ところが、先に口を開いたのは、陽子のほうだった。
「実は私、妊娠してるんですよ」
　それは恐ろしく衝撃的な言葉だった。
　私の側にかぎって見れば、この片思いには何という道化的な、子供っぽい結末が与えられたことだろう。
　私はものの見事にフラれたのである。なんと彼女には、すでに恋人がいて、彼との間に子供まで作っていたのだから。
　しかし私は、陽子に「ご相手」がいるのを知った上で、それでもなお、彼女に好きだと告白した。
　そして、さらには彼女に向かって「君のお腹にいる子供の父親になりたい」とまで言い放ったのである。ここまで来ると、さすがに無鉄砲としか言いようがない。
　こんな私を見て、
「彼は、何を好きこのんで、他の男の子供を腹に宿している女性などと、結婚するつもりになったのであろう」
　と言う者もあるかもしれない。どうぞ好きに言ってくれればよい。
　とはいえ、この放言や無鉄砲には、それなりの理由があった。
　それは陽子が、少しも迷いなく、本当に少しの迷いもなく「堕胎」をしようとしていたからである。
　また、その躊躇いのない決断が、陽子と彼女の恋人との間にある、異様な「情愛の希薄さ」を、私に感じさせずにはおかなかったからである。

中絶と「誰でもない」陽子

そのように私は、陽子の子供の養父になろうとした。

しかし結局、彼女は中絶手術を決行した。そして全てのカタが着いたあと、私に手紙をくれた。そこには「私がいなくなっていました」と書かれてあった。

何とも奇妙な言い回しではあるが、確かに陽子は「いなくなっていた」ようだ。

というのは、陽子は「他人の意向の中で生きること」が、根っからの性分となっている女性だったからである。陽子からの手紙にも、そのように書いてあった。

そして彼女は、そうやって他人の意向の中で生きているうちに、自分自身の主体性と個性とを、すっかり見失ってしまったのだ。それが、彼女が選んだ生き方の帰結だった。

してみると、私と出会った頃には、すでに陽子という個性は「虚ろな幻影に過ぎないもの」になっていたのかもしれない。

いや、断言してしまおう。その時点で、すでに陽子の個性とは「虚無」だったのだ。それだからこそ私は、この「虚無」を愛したのだ。狂おしいほどまでに、それを求めあぐねたのだ。

きっと、個性を持たないがゆえに、もはや誰でもないのが陽子だった。いわば彼女は、古代から甦った「ウーティス」なのである。

ルベドの悟り

そんな彼女に恋することによって、私は、自分の心のなかに「虚無」を招き入れる準備を進めていた。

そしてついには、同一内容の手紙を交換することで、私は陽子の虚無を、自分の心のなかへと、完全なかたちで取り込んだのだった。

ために、ここに悟りの現象が現れた。

見よ。すでにアルベディアンであった私の心中には「存在そのもの」が保管されていた。

そして、この「存在そのもの」が、陽子からもたらされた「虚無」と化学反応（合成）を起こしたのである。

それは完全に自動的で、完全に無意識的な反応だった。

そして、そこから生じた合成物こそ「虚無からの存在の創造」というヴィジョンだった。クリスチャンが言うところの「無からの創造」のヴィジョンである。

これが生じることによって、私のグノーシスは、創造神の本質を知ることになった。

それこそ神との等化現象であり、ルベドの悟りに他ならない。

（２）赤い多頭の竜の出現

手術の二日後

この一連のドラマの中で、私にとって、とりわけ忘れがたいエピソードがある。それは陽子の「無茶苦茶な仕事ぶり」によって引き起こされたことだった。

ここには本当に、彼女の心の性質が、無慈悲なまでに直接、現実に反映されている。

それは陽子の堕胎手術が行われてから、二日後のことである。

そのような日であるのにも関わらず、陽子はアルバイト先でレジ仕事をしていた。そうして手術直後の体を、無残なまでに痛めつけていたのである。

私は何も知らないまま、陽子と横並びになってレジの接客をしていた。そして、彼女から漂う匂いによって、陽子の女陰から血が流れていることを知った。

このあたり、少し『太陽を着た女』から、直接に文章を引用しておこう。

第四福音書『太陽を着た女』より

「まさか、もう手術を受けたのか？」

陽子が頷く。私は捲し立てた。店のレジに立っているというのに、とても冷静ではいられなかった。

「なんでだよ！　だって、そうしたら、ほとんど日にちが経ってないってことだろ。俺が病院で君を見たのは、一昨日のことなんだから。なんで手術をした二日後に、立ち仕事なんかしてるんだよ！」

「今日は、どうしてもシフトを変えられないからって店長から言われて。だって、中絶のことなんか言えるわけないし……」

「馬鹿か、あとは俺が何とかするから帰れ！」

「大丈夫です。怪しまれたくないし……」

陽子はその後も「どうしても」と言って仕事を続けた。

しかし彼女が無理をしているのは明らかだった。何より私は、彼女のズボンの中で滴り落ちているはずの、鮮血を想像してゾッとなった。そこでは、なまじのナプキンでは吸いきれないほどの「大量の血」が流れていたに違いない。

このとき私は、陽子の悲しい精神構造を見たような気がした。

それは「自分を守ること」よりも、「他人の要求に応えること」をはるかに優先してしまう、というものである。

そうでなければ、店長の言うことを聞いて、手術の二日後にレジに立つなどする訳もない。
そして私は、そんな陽子の心に対して、何とも言えない悔しさと、憐れみとを感じたのだった。

多頭の赤い竜

それから数か月後のことである。私はたまたま新約聖書の『ヨハネの黙示録』の部分を読んでいた。
そして私は、例の第十二章に至って、心の奥から、猛烈な怒りが込み上げてくるのを止められなくなった。
そこには、こう書かれていた。

女は身ごもっていたが、子を産む痛みと苦しみのため叫んでいた。
また、もう一つのしるしが天に現れた。見よ、火のように赤い大きな竜である。これには七つの頭と十本の角があって、その頭に七つの冠をかぶっていた〔多頭の竜である〕。（中略）そして、竜は子を産もうとしている女の前に立ちはだかり、産んだら、その子を食べてしまおうとしていた。

私はこの記述に、あの日、陽子の太ももを伝っていった「血のしたたり」を重ね合わせていた。そんな私の口からは、吐き捨てるように次の言葉が出た。
「赤い竜め、お前はそうやって子供を喰らったのか！」
事実あの日、陽子の太ももを流れていった血を遡っていけば、である。その遡流は間違いなく、かつて胎児が収蔵されていたはずの「子宮」に辿り着くはずだった。
かかる彼女の子宮において、陽子の胎児は、その芽生えたばかりの命を奪われた。
そして、その結果として、子宮から端を発する「血流としての赤い竜」が、その姿を現したのである。換言すれば、下向きに這い出す蛇として！
長く伸びた線状の血は、まさしく赤い色をした竜のように見えたことだろう。
しかも、その堕胎のシンボルとも言える「血流としての赤い竜」は、おそらく一本線のままではなかったはずだ。
それは幾つかに枝分かれしながら、膝や脛までも流れていったに違いない。したがって、それはきっと「多頭の竜」のごとき様相を見せていたはずなのである。

神話を生きている自覚

ある程度の時間がたち、ようやくして私の昂った気持ちが収まってきた。
そうすると私は、上述したような『ヨハネの黙示録』との符号を噛みしめながら、こう思わずにはいられなくなった。
「現代こそ、黙示録が描いている時代なのだろうか。俺は、黙示録の時代を生きているのだろうか」
こんなことは、ただの考えすぎなのかもしれない。勘違いなのかもしれない。
しかし確かな霊的感触として、当時の私は「黙示録を通して運命を操る何者か」の臨在を感じてはいた。
しかもユングが次のような言葉を残してくれている。本書の冒頭でも触れたが、ここでもう一度同じ文章を掲げよう。

神話は人間の身の上に起こるものであり、人間はギリシアの英雄と同じ神話的な運命を持っているのである。
それゆえキリストの一生が高度な意味で神話であったということは、それが事実として存在したということと何ら矛盾するものではない。

ある元型（＝神話的内容）がある人を完全に捕らえ、彼の運命を細部にいたるまで決定するということは、心理学的には十分にありうることである。
そういう場合には、その元型の表れでもある客観的な・すなわち心的でない・〔現実的な〕平行現象が現れることがある。

元型（＝神話的内容）が個人の中で心的に現れるばかりでなく、個人の外で〔個々の現実として〕客観的にも現れるということは、そう見えるというだけでなく、事実そうなのである。
私はキリストがこの種の人間であったと推測している。

簡単に言えば、ユングは「現実が神話のようになったとしても、そこに矛盾や不合理性はない」と断言してくれているのである。

神話を生きる重責

しかも私は、のちにディオニュソスの神話にも出会うことになる。
それによって私は、次のことを知ることになった。
すなわち、自分の身に降りかかってきた「神話」が、実は「ギリシアの神話時代」と「黙示録のヨハネの時代」を重ね合わせたものであること。

それどころか、そこへさらに「黙示録が現実化する現代」という、三つめの舞台をも、重ね合わせたものであること。

つまり私の神話が、そのようにも「異様に込み入った多層構造」を持っていることを思い知らされたのである。

三重の層を重ね合わせた神話――それは途方もなく壮大なスケールをもつものだった。

それほどの神話が、ここにいる自分にのしかかっている。そう思うと私は、何か極大的な「責務」を負わされたような気がしてきて、思わず息を吸うのも苦しくなった。

再臨のキリストによる福音書　５-Ⅲ

著　　正道

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社